昭和14年2月3日(（三日目）

　零下20度、凍ったワイシャツやリュックで風除けを作り夜明けを待つ。寒気凛冽、鼻先凍るほどの暴風雪の中焚火燃やすが直ぐ消えてしまう。温情課長で信望厚かった「蟹江」は死生の場でも部下にワイシャツやチョッキを貸し介護に当たる。夜も明け始めた午前5時頃、一人二人と眠るが如く息を引き取る中、「蟹江」も手が凍り自由を失っていたので、比較的元気な「飯田」がスキーを履かせたり締め具を包帯で巻き付け出発の準備をした。又、友の亡骸の所在のためワイシャツを枝に目印にした。3人で出発するも「蟹江」は途中断念し元の場所に喘ぎ喘ぎ戻り枯木で暖をとった。発見された時、ズボンをずり下げ尻を温めた姿で発見された。二人は例の「水門」を通過、沢に黒いものがあるので近付くと昨夜帰らなかった「奥田」だった。大声で叫ぶと起き上がり、腰を掛けて並びボソボソ話をした。午前10時ころ「さぁ、行こう」と奥田に声を掛け立ち上がる。フラフラしながらも下流下流へと下るが、性根尽きたのか6メートルばかり投げ出され頭を雪に突っ込んだ形で奥田は絶命した。

　川筋は荒れ川で断崖や滝がいつになったら無くなるかとあきれる程で、出発してから5時間、スキーを捨て疲れ果てた「須田」は遅れ「奥田」は一人、先を急ぐ。時は昭和14年2月3日、突然目の前に発電所が蜃気楼のように華麗な姿を現した。

　「飯田」は現実に戻り、30分遅れの「須田」や他に残した遭難者の救いを乞うた。樺太生まれの「飯田」は超人的な体力だけで片付けられない教訓を山男たちに示してくれた。シール貼り付けのスキー、アノラック、防寒帽毛糸の手袋などの冬服装、十分すぎる予備食糧、生への不屈の限りない執念、これらを身をもって教えてくれたのが「飯田大蔵」であった。（日帰り予定だったので他の職員はシール装着2～3名、手袋は軍手、子供の花柄刺繍の小さなリュック、そしてリーダー不在で冬山軽視も甚だしい）